氏　　名　伊藤美加（いとうみか）
学位(専攻分野)　博　士（教育学）
学位記番号　教　博　第 27 号
学位授与の日付　平成14年3月25日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　教育学研究科教育科学専攻
学位論文題目　感情が認知過程に及ぼす影響に関する研究
——気分一致効果を巡って——

論文調査委員　（主査）教授 子安増生　助教授 吉川左紀子　助教授 楠見　孝

論文内容の要旨

本論文は，感情が認知過程に及ぼす影響を示す現象の1つである，気分一致効果を取り上げ，この効果の表れ方を左右する種々の要因について実証的に検討したものである。気分一致効果とは，楽しい，悲しいといった気分が生起すると，その気分と一致する感情価をもつ情報（たとえば性格特性語）の記憶や判断が促進される現象を指している。この現象は1980年代に最初に報告されて以来，注目を集めてきた。本論文で検討されたのは，自己関連性，非対称性，選択的精緻化，動機づけ，個人差の諸側面であり，すでに公刊されている6本の論文（うち5本は専門誌に掲載）の内容を中心に，それらを加筆修正する形で1つの論文としてまとめられた。

第1章では，気分一致効果を検討する意義について論じた後，本研究で採用した「音楽による気分誘導法」を含む研究法を概観し，さらにこれまでの代表的研究例について紹介している。90年代以降の気分一致効果の研究は，初期に提案された感情ネットワークモデルではうまく説明できない現象の発見と，それを説明するための新たなモデルの提案という方向で進展してきた。第1章では，そうしたモデルの1つである感情スキーマモデルを取り上げて感情ネットワークモデルとの関連について論じている。

第2章では，まず実験1で，性格特性語を処理するときに，「自分に当てはまるかどうか」を判断する自己記述課題を用いて気分一致効果を検討した。その結果，快気分を誘導された被験者は自分に当てはまると判断されたポジティブ語を，不快気分を誘導された被験者は逆にネガティブ語をより多く再生することが示され，自己関連処理における対称的気分一致効果が確認された。また，実験2では，自伝想起課題を用いて同様の実験を行い，想起の有無にかかわりなく再生率に気分一致効果が見いだされた。これらの結果は，感情ネットワークモデルが仮定する概念の自動的活性化ではなく，セルフスキーマによる選択的精緻化が，気分一致効果の生起因として重要である可能性を示唆している。

第3章では，第2章の結果を踏まえて，自己関連処理にみられた気分一致効果がセルフスキーマの活性化による固有の現象であるのか，情報を特定の人物と関連づけて処理する場合に一般的にみられる現象であるのかを検討した（実験3）。対象人物を母親として実験1と同様の課題を行った結果，ポジティブな気分でのみ気分一致効果がみられた。さらに次の実験4では，好きな友人，嫌いな友人を対象人物として同様の課題を行い，ほぼ実験3と同様の結果を得た。これらの結果から他者関連処理ではポジティブな気分でのみ気分一致効果がみられるといえ，気分一致効果が自己関連処理とそれ以外の処理では異なること，および選択的精緻化の重要性が示された。

第4章では，気分一致効果が感情価をもつ情報の自動的活性化により生じるのか，選択的精緻化により生じるのかを明らかにする目的で，潜在・顕在記憶およびデータ駆動・概念駆動型処理を組み合わせた記憶課題を用いて自己関連処理における気分一致効果を検討している。その結果，概念駆動型顕在記憶テストではポジティブ・ネガティブの両気分において，また概念駆動型潜在記憶テストではネガティブ気分においてのみ気分一致効果が認められた。このことから，ポジティブ・ネガティブの両気分では気分一致効果の生起過程が異なることが示唆された。

第5章では，最近注目されている，感情のもつ調整機能および個人差の問題を取り上げている。まずこれまでの研究や説明理論を概観する中で，とくに注目されたのは，一時的な気分と安定した感情特性が認知にどう影響するかを詳細に議論したRusting（1998）の考え方である。Rustingの議論に基づいて，気分と感情特性が認知におよぼす影響を3種類に分け，探索的な実験を行って，両者が認知に及ぼす影響が検討された。その結果，一時的気分が安定した感情特性によって調整されると考えることで，多様な気分一致効果が説明できる可能性が示唆された。

第6章では，第5章までの結果を踏まえて，記憶や判断におよぼす多様な感情の効果を1つの説明理論にまとめ，さらに今後に残された課題として，(1)感情の特定性，(2)対人関係における感情，(3)感情の生起過程を指摘している。

論文審査の結果の要旨

本論文で取り上げられている気分一致効果は，その時々の気分と一致する情動価をもった情報の判断や記憶が促進されるという，日常的な体験とも密接に関連する興味深い現象である。

認知心理学において○○効果とよばれる現象はこれまで数多く報告されているが，気分一致効果がとくに注目されるのは次のような理由からである。第1に，従来，全く独立した文脈で研究されていた認知と感情を統合的に研究できる可能性を明示した点，第2に，感情のはたらきを認知心理学の理論的枠組みで説明可能であることを示した点である。また方法論に関しても，気分一致効果は実験室内で特定の気分を誘導する，種々の手法の考案を促すきっかけとなった。実際，気分一致効果の研究を進める上でもっとも重要なのは気分誘導の成否である。この点に関して，本論文ではすべての実験について，先行研究を参考に音楽による気分誘導法を採用し，さらに記憶課題の前後に綿密な気分評定を課すことによって，快，不快の気分誘導を確認するという周到な方法を採用している。

さて，気分一致効果を説明する初期の理論としては，感情ネットワークモデルが提案されたが，その後このモデルの予想とはうまく合致しない現象が報告されたため，新たな説明モデルや修正モデルが提案されて現在に至っている。本論文では，こうした修正モデルとして感情スキーマモデルを取りあげ，自己関連処理を中心に，このモデルの適用可能性を検討する実証研究を丹念に行っている。

本論文で報告されている複数の実験から明らかになったもっとも重要な結論は，感情による概念の自動的活性化という考え方では，気分一致効果の多様な表れかたを十分に説明することはできず，スキーマモデルで仮定されるような，何らかの選択的活性化のメカニズムを仮定する必要があるということである。この点に関して，第2章で検討された自己関連処理および第3章で検討された他者関連処理において同様の結論が得られたことは重要な点であるといえる。また，自己関連処理と他者関連処理での気分一致効果の表れ方には質的な違いがあり，特定の人物に関するスキーマの構造や活性化の相違が気分一致効果を左右することを示した点も新しい知見である。

第3章で検討されている他者関連処理では，自分の母親や，友人の中の好きな人物と嫌いな人物に性格特性語を関連づける処理を行ったときの気分の影響を検討している。このとき，対象人物の好悪に関わりなく気分が快の時には快情報の記憶が促進される一方，不快気分ではそうした効果がみられないことが明らかになった。こうした結果は，自己関連処理にみられる快，不快気分の対称的な効果とは異なるものである。また，気分の違いという観点からみれば，これらの結果は，対人認知において快気分と不快気分のもつ機能的意味が異なることを示唆するものである。

第4章では符号化時の記憶負荷を操作した実験，および検索時の要因を操作した実験を行い，自己関連処理における気分一致効果についてさらに検討を加えている。その結果，記憶負荷を与えて情報の精緻化が困難な状況で課題を行うと気分一致効果が消失すること，また潜在記憶テストでは対称的な気分一致効果がみられなかったことから，自己関連処理における対称的な気分一致効果の生起は，情報の選択的な精緻化に依存していることが再確認された。

第5章では，気分一致効果の生起因として，感情のもつ調整機能を仮定する考え方や，個人差要因の影響を考慮する最近の考え方を取りあげ，それらに対して著者が行った探索的研究を紹介している。この章で取りあげられた現象は今後の研究の展開を示唆する興味深い視点を含んでいる。ただ，記述がやや荒削りで他章とのバランスに欠ける点が問題として指摘できるが，第6章で提案された統合的説明モデルの検証も含め，これからの研究課題であろう。

以上のように，本論文では気分一致効果をめぐって行われた多くの実験から種々の成果が見いだされたが，いくつかの問

題点も指摘された。まず，実験室での気分誘導のもつ，被験者にとってのリアリティの問題が挙げられた。音楽における気分誘導は，気分評定によって誘導の成否が一応確認されるわけだが，そうした気分の強度が課題遂行中，安定しているかどうかなどは不明である。また実験で気分を誘導することについては倫理上の問題も十分に考慮する必要がある。さらに，本論文の第6章で提案されている，感情が認知におよぼす影響についての説明図と，感情スキーマ理論といった従来の説とがどのように関連づけられるのかがあまり明確でないことも問題点として挙げられる。しかしながら，こうした点は本論文で明らかにされた気分一致効果の生起因に関する多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成13年2月28日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。